震災遺児に進学の夢を

# みちのく未来基金 設立の記録

公益財団法人 みちのく未来基金

みちのく未来基金設立の記録

公益財団法人 みちのく未来基金

震災遺児に進学の夢を

# みちのく未来基金
# 設立の記録

第一章

# はじまりのひとしずく

2011年3月11日、東日本大震災で、1700人を超える子どもたちが、愛する親やかけがえのない家族を失った。

「神戸でやり残したことがある」

山田邦雄（ロート製薬会長）の発したひとことが、この基金のスタートだった。

2011年4月20日、資生堂の社長に就任した末川久幸の激励会に集まった仲間たちの会話は、当然のごとく1ヶ月前に起こった東日本大震災の話に集中した。メンバーはマーケティング界の重鎮だった水口健次の教え子で、皆、企業の経営に携わっており、それぞれの企業で多額の義捐金や物資、そしてボランティアの派遣と最大限の支援活動を行っていたが、何かが足りないことを感じていた。山田の一言に長沼孝義（カルビー副社長）は即座に「山田さん、それはどういうことですか?」と反応した。

山田の経営するロート製薬は大阪に本社を置き、また自宅が神戸であったこともあり、1995年に起きた「阪神・淡路大震災」の時、様々な支援を経験した。

「子どもたちの支援ができなかった。建物や道路は復興したが、一度、他の地域へと移り住んだ子どもたちは帰ってこなかった。今度のこの震災は桁が違う、子どもたちのために何かしないと、本当の街の復興にはならない」

それが山田の語った言葉だった。ロート製薬は3月30日にいち早く「復興支援室」を立ち上げ、河崎保徳が支援室長に就任していた。河崎は就任後すぐに被災地に入り、支援室スタッフの社内公募に手を挙げた西山隆則、藤田晋太郎、二瓶真衣、辻佳代子たちとともに学校に薬箱を届ける活動をしていて、子どもたちの様子を肌で感じていた。

4月4日に初めて被災地に入った西山と藤田は、東部道路から見た光景や、最初に訪れた仙台市立六郷小学校の体育館で言葉を失った。

「被災した子どもたちのために、何か活動をしたい」

集まったメンバーの想いは共通の想いとなり、さっそく長沼と河崎は20日の会合に集まった企業が協力して基金をつくり、子どもたちのための支援ができないか、その案づくりに取り掛かった。長沼にとって仙台は生まれ故郷でもあり、復興支援の活動をスタートさせた河崎は20年来の旧友である。そして何より4月12日の朝日新聞に掲載された1枚の写真、瓦礫となった自宅の前で行方不明の母親と祖母のためトランペットでＺＡＲＤの「負けないで」を吹いてうつむく少女の写真に、胸を締め付けられる思いだった。この少女は大船渡高校の生徒で、後にみちのく未来基金の第1期生として進学を果たした。

5月10日、ロート製薬は懇意にしていた井上先生（井上正康：宮城大学副学長）の協力により、宮城大学（宮城県黒川郡大和町）内に復興支援室の拠点を開いた。長沼と河崎は具体的なプラン作りに入ったが、子どもといってもその対象をどうするのか、また支援の中身をどうするのか、まったく白紙の状況から議論をスタートさせた。

現地で学校を回った河崎は、高校の先生から、一夜にして親や家族を失って深く傷ついた子どもたちの多くが大学への進学を諦めようとしていること、そして高校卒業後の進学支援がほとんどない現実を知った。この震災で親を失った遺児・孤児は２０００名近くいることも分かっており、まずは両親を亡くした孤児を対象とし、高校卒業後の進学を支援する奨学基金を設立することを骨子とすることでふたりの意見は一致した。

長沼はさっそく松本晃（カルビー会長）に、被災した遺児たちの進学支援のために民間企業が協働で奨学基金を立ち上げて活動する構想を伝えたところ、松本は「日本人は短期的な支援は得意だが、長期的な支援はともすると苦手だ。この震災を10年、20年、30年後も決して忘れてはならない。是非やろう」とふたつ返事で賛同してくれた。

## 第二章　支度の季節

河崎は藤田と共に松下幸之助記念財団を訪ね、奨学基金運営のノウハウのヒアリングと併せて公益法人格取得のアドバイスを受けた。しかし、手続きが煩雑で非常に時間のかかることを痛感して帰ってきた。長沼はカルビーの基金設立参加について経営会議で賛同を得ると同時に、ロート同様、現地で活動するスタッフの社内公募の準備に入った。

6月17日、山田、長沼、河崎の3名はカゴメを訪問し、喜岡浩二（カゴメ会長）および西秀訓社長に、震災遺児を対象とした奨学基金設立への参加を要請した。4月20日の会合に参加していた石榑康利（カゴメ物流社長）を通して喜岡、西には構想が伝わっており、カゴメは日本赤十字社を通して多額の義捐金支援等の活動もしていた。それでも、直接被災者たちに届かない歯がゆさを感じており、また喜岡はカルビーの社外取締役を務めていることもあり、是非3社で立ち上げようと賛同してくれた。

こうして3社によるプロジェクトがスタートすることとなり、メンバーは、カゴメ小篠亮（執行役員）、大澤則和（企画グループ課長）、カルビー長沼孝義、二宮かおる（社会貢献委員長）、ロート製薬河崎保徳、藤田晋太郎の6名で構成された。進学支援のための資金がどの程度必要になるのか、運営の仕組みをどのようにするか、また3社の最終合意をいつまでに固めるかなど、課題は山積していた。プロジェクトによる具体案作りと並行してインフラの整備や高校を訪問しての状況把握も進めなければならず、長沼はロートの復興支援室のメンバーと合流させるべく急ぎカルビーでのスタッフの社内公募をかけた。

第1回のプロジェクトミーティングは7月12日に仙台で開かれ、8月25日を最終タイムリミットとして毎週開催し、改めて奨学金給付対象の範囲や長期的支援のための財源、また人的支援の確保など多くの課題がありながらも、当面6年間の具体的な事業計画をつくることを決定した。

翌週21日には、支援対象を両親およびいずれかの親を亡くした遺児・孤児とすること、また進学先は大学、短大、専門学校とすることとし、入学金、授業料を返済不要で給付することを決定した。対象を遺児にまで広げた背景のひとつには、福島出身の伊藤秀二（カルビー社長）が同じ福島選出の玄葉光一郎代議士と会って基金の話をしたところ「何らかの条件をつけてもよいから、是非いずれかの親を亡くした遺児も支援の対象にしてほしい」と聞いたこともメンバーの背中を後押しした。

進学先については、街の真の復興は美容院や飲食店、生花店、介護施設など様々な店や施設があって成り立つ、そんな仕事を目指す子どもたちの夢を応援することも大事だと判断し、専門学校への進学支援を決定した。これは後に多くの寄附者の賛同を得ることとなり、また同時に多くの進学希望者の受け入れに繋がり、嬉しい結果となった。

日本の奨学金の多くは返済義務があり、奨学生は社会に出た後、返済に窮することが多々あり、また被災地には大学や専門学校は極めて少なく、進学を希望する子どもたちは都会に出て一人暮らしの生活が当たり前だったので、この仕組みにより不安なく学ぶことができると考え、返済不要のみならず他の奨学金との併用受給も認めることとした。また9月21日に3社会長による奨学基金設立の記者発表を行うことも決定した。骨子を決定していない状況ながら、タイムリミットをはっきりさせることでプロジェクトは集中度を高めた。学校や保護者、そして寄附者の信頼も得やすくするためには公益法人の認定を得ることが望ましいとの共通認識がプロジェクトのメンバーにはあったが、全く見通しが立たない状況だった。

そんなある日、長沼が石垣薫（カルビー執行役員）と昼食を取りながら基金のプロジェクトの話をしたところ、石垣から「カルビーの顧問弁護士の堀裕先生（堀総合法律事務所代表）が公益認定等委員会の委員だから、相談してみたら」とのアドバイスを得た。そして、7月27日に藤田と訪ねたところ、「任せてください。素晴らしい構想なので、全面的に応援したい」との力強い支援の言葉をもらい、さらには相談に乗ってくれる内閣府のスタッフまで紹介してくれた。

また併せて、公益認定に関しての重要なポイントとして、評議員の人選にあたっては発起3社と直接利害関係のな

い人物であり、第三者からみても客観性が保てて、かつ3社が信頼の置ける人物を選ぶことが重要とのアドバイスを得た。公益法人の認定取得の難しさを痛感していた藤田は、認定への道が開けたと感動し、さっそく財団設立の準備に没頭した。

8月3日、河崎は仙台第二高校の庄司校長を訪ね、基金の構想を説明したところ、「来年の卒業生の進路は、お盆休みに本人や家族で考え、8月末には教員も交えて最終決定する。9月6日からは就職試験も始まり、今年は就職希望者も昨年より2割ほど増える見通しで、県内の企業には高卒採用枠を減らさないようお願いしている状況だ。もし本当に進学支援の基金ができるなら、早めに対象となる生徒に案内してほしい」との強い要望を聞き、タイムリミットを早め、盆前には事業計画をまとめることにした。

民間企業3社が協働して作る奨学基金の骨子をたった1ヶ月で作り上げるということは皆経験もなく、単独企業でさえも極めて困難なタイムリミットでコンセンサスを得ることは到底不可能と思われた。しかし、絶望の淵に立つ子どもたちのためにという想いは、メンバーを、そして3社の経営を動かした。

さて、大きな課題のひとつは、奨学金をいくらにするかということであった。このことは基金の計画の根幹に関わることでもあり、一律支給から上限無制限まで実に様々な議論がなされた。私大医学部に進学すれば、年間数百万円の授業料がかかることもある。一方、国公立大学に進学すれば数十万円とその額には大きな差があるわけだが、子どもたちの夢の大きさには全く差がない。ともすれば、一律支給が当たり前の基金が多いなか、我々民間企業が協働で基金を立ち上げる意味は、この一人ひとりの状況に応じた支援をするところにあるのだと一致した。そして、全国の大学や専門学校の授業料を調べた上で、年間上限３００万円とすればほとんどの学校への進学が可能だと判断し、この範囲での全額支給を決定した。また対象の生徒は２０１２年4月以降の進学希望者から震災以前に生まれた全ての遺児・孤児を対象とすることも決め、その活動期間は最後の遺児が学校を卒業するまでの約25年間とすることも確認した。



長期にわたる活動を維持するための資金については、主たる対象の三陸沿岸地域の進学率は平均で約45％であることも調査しており、毎年約50名を支援すると仮定し、最初の6年間の事業費は最大で約10億円と試算した。そこでカゴメ、カルビー、ロート製薬の発起企業3社は毎年各社３０００万円の資金を提供し、あとは一般からの寄附によって運営することで可能だろうと判断した。また基金の運営費用は3社からの資金で賄うこととし、一般からの寄附は全て奨学金として使うことも決めた。

プロジェクトの最後のテーマは、基金のネーミングであった。プロジェクトメンバー全員が案を出し、「東北の未来応援基金」を最終案と決めた。プロジェクトの進捗については各社での最終の決議に齟齬がないよう都度情報を共有していたので、基金のネーミングについても各社の根回しに図ったところ、ある日長沼の携帯にカゴメの喜岡から「もっとシンプルにし、『みちのく』というワードを入れてはどうか」とのアイデアが届いた。

結果、最終的に「みちのく未来基金」と名付け、キャッチコピーを「震災遺児に進学の夢を！」と決定した。「みちのく」という単語を使うにあたって、河崎は青森にみちのく銀行があることから念のため事前に訪問し、『みちのく未来基金』という名で遺児の進学支援の基金活動を行うことを説明し了解を得た。

8月10日、懸案であった評議員も堀先生のアドバイスに沿って恩田俊二（キヤノン常勤監査役）、神崎隆（新日本有限責任監査法人シニアプリンシパル）、八木洋介（日本ＧＥ取締役）の3名が内定し、また3社以外からの理事として小菅崇行（小菅会長）と笹田学（元横河電機常務）が参加することとなり、監事は石田正（カルビー常勤監査役）が引き受けてくれた。

この時点では、代表理事と業務執行理事は外部からの招聘を意図して未定であったが、8月末には現場に根ざした実務的な基金運営を目指すことが確認され、代表理事には長沼が、業務執行理事には河崎が就くこととした。

約1ヶ月間という異例の短期間でプロジェクトの最終案は確定し、山田、喜岡、松本をはじめとする3社の強い結束力で各社の決議を経て9月21日には予定通り記者発表できることとなった。

異業種の3社が集まり、何故短期間で基金ができたのか、まず第一に、3社の企業規模がほぼ同じで、生活に密着した消費財企業であること、第二に、社員の積極性や意思決定のスピードなど企業の風土に共通する点が多々あること、そして第三に、何より経営哲学や社会に対する責任の認識等、考えが共通する山田、喜岡、松本の3人の経営トップがいたことが挙げられる。

8月23日にはカルビーの社内公募に応じた安井正紀、西澤省吾の2名が仙台に入り、学校訪問活動と基金の事務基盤づくりが本格的に始まった。カルビーでの人選の際には長沼が直接面談したため、後に安井と西澤は「人事部長との面接とばかり思っていたのに副社長が直接面談しに来られたので、その本気度を感じ、覚悟ができた」と笑って話してくれた。

基金の素案作りの一方で、内々に遺児たちに情報を伝えたいと活動を始めていたが、被災地の混乱や個人情報保護法等の壁もあり、行政等を訪ねてもらちが明かない状況にあった。河崎は生粋の大阪育ちで東北には知人もなく、当初は訪問先選びにも苦労したが、長沼の幼なじみの秋元俊通（秋元技術コンサルタンツ代表）、山本健太郎（東北放送常務）、そして後輩の中村喜一（中村スポーツ専務）らがそれぞれのネットワークを駆使して支えてくれた。河崎は、彼らの支援がどれだけ励みになったか、語り尽くせない、と後に語った。

安井は宮城県の高校を担当することとなり、沿岸地域の高校へ説明のためのアポイントを取っていたが、電話では説明にも時間がかかり、直接訪問して歩くこととした。これが現在でもみちのく未来基金が学校の現場を訪問して遺児たちに「夢をあきらめるな」と直接伝える原点になった。

西山は岩手県を担当したが、エリアは広く沿岸地域の道路はあちこちで寸断され、高校の訪問は困難を極め、また宿泊するところもなく、車の中で寝泊まりすることも度々あった。

そんなある日、岩手大学を訪問した西山が岩手県高校校長会会長の高橋和雄校長（盛岡第一高校）を紹介され、基金の情報を伝えるのに苦労していることを話すと「そんな素晴らしいことを始めるなら県内の高校に伝えるし、宮城、福島の校長会会長にも伝えたい」と支援を約束してくれた。河崎が宮城県高校校長会会長の庄司恒一校長（仙台第二高校）、福島県高校校長会会長の杉昭重校長（安積黎明高校）を訪ねたところ、2県とも全面的に協力してくれることとなった。この3県校長会の支援のお陰で、高校訪問は以後スムーズに進んだ。

福島生まれの二瓶は地元の福島を担当したが、被害の大きかった相馬地区では原発の影響もあり、岩手、宮城とはまた違う難問を抱えた遺児たちと出会うことになった。

西澤は基金の拠点を宮城大学に置くことを決定していたので、電話回線の設置やネット環境の整備、ホームページの開設、金融口座の開設と、全く未経験の仕事に取り組んだ。

9月21日の記者発表は決定しており、まずは電話回線の設置が急務であったが、震災の影響で開設が間に合わない可能性もあり、河崎と奔走した。藤田は内閣府のアドバイスを受けながら公益法人の認定に向けて膨大な作成資料と格闘した。8月30日には気仙沼西高校に専門学校に進学が決定した遺児がいることが分かり、第1期生の最初の対象者となった。

また、本吉響高校の佐藤浩教頭と面談した時、給付時の支払い方法について質問され、「直接保護者の口座へ振り込むことを検討している」と答えたところ、「万が一、保護者がそのお金を進学費用以外に使ってしまい、子どもが進学できなくなってしまったら、誰が責任を取るのか」と問われ、このアドバイスから、基金は授業料等を直接進学先の口座に振り込むという方法を取り入れることとした。

基金はその仕組みについて、学校の先生や保護者の方々との直接の面談を通して、子どもとその保護者にとってシンプルでより良いあり方を、現在も常に模索し続けている。したがって、奨学金受給の条件はひとつ目に震災遺児・孤児であること、ふたつ目は学校が推薦してくれること、そして3つ目は進学希望校に合格することとし、手続きは必要最低限の書類で済むようにした。高校を訪問できるようになり情報を伝えると、就職さえ困難な沿岸地域の状況もあり、当初２０１２年4月進学予定の第1期生を3県で約50人と想定していたが、なんと宮城県内だけでも60人を

超える進学希望者が見込まれた。

そんななか、安井は気仙沼で三浦美咲さんと出会った。少女は両親、2人の妹、おじいちゃん、おばあちゃん、そして、ひいおばあちゃんの家族7人全員を津波で亡くした。美咲さんは家族を探すのに必死になり、避難所を転々としたそうで、そのため食事の割当の対象となれず、なかなか食べられなかった経験から改めて食事の大切さを感じ、栄養教諭を目指して進学したいと話したという。美咲さんは1年目の追悼式で家族全員への想いを伝え、最後に「お母さんと呼びたくて、美咲と呼んでほしくて、お母さんみたいなお母さんになりたい」と語った。

一方で、被災地域の高校の先生にも家族や家を失った方が多くいるなか、わが身をおいて生徒たちの進路について熱心にアドバイスするその姿にスタッフは強く心打たれた。この活動は、高校はじめ、多くの先生方の支援があって成り立っている。後に、石巻西高校の齋藤幸男校長が当時の状況を含めて語ってくれた。

「東日本大震災が発生して、学校では入試対応や避難所運営に追われている頃、何度も何度も『教育は無力なのか？』と、心が折れそうになっていた。しかし、かつて3年間担任をした教え子のお父さんのテレビ映像を通して、『先生、何を迷っているの？頼んだよ、子どもたちを！』という言葉をかけられたように感じて、もう一度子どもたちと向き合わなければならない、命と向き合わなければならないと思い直したんです。そのお父さんがおっしゃられた『果たしてこれから、この国の子どもたちが何を期待するか。それは教育だ。財を残すことは二の次です。人間をつくるのは教育。がっちりした教育をやってもらいたい。教育にお金を使うことで、教育を受けた子どもたちが、今度は人のために尽くすわけさ』と、この言葉を聞いて涙が止まりませんでしたし、『先生しっかりしてくださいよ』と言われているようでした。この言葉を聞いて思ったのは、学校現場とみちのく未来基金の目指すものが重なるのではないかということ。教育は人をつくるのです。我々教員がいくら理想論を言っても、生活を支えてやれないと思っていた時に、みちのく未来基金の存在を知り、東日本大震災で保護者を亡くした子どもたちの高校卒業後の保障を得られる機会を



頂きました。感謝の気持ちと、『これからも、よろしくお願いします』という気持ちで一杯です。子どもたちの力というものは、皆さんが考える以上のものがあります。これから日本で、また別の災害が起きることもあるでしょう。その時にこそ、子どもたちの笑顔が支えになっていくのです」

## 第三章　奔走する日々

9月20日、翌日の記者発表を前に初めて3社のトップ、山田、喜岡、松本が同席し、会見の準備と、3社での基金設立と長期の運営に関する「覚書書」を交わした。翌日の記者発表を前に徹夜で作業をしていた西澤は、ぎりぎりで電話回線の開設もホームページの準備もできたと嬉しそうに報告してきた。

21日、記者発表は東京會舘で開かれ、カゴメの河津佳子（広報グループ課長）の進行でスタートした。初めに山田が基金設立の趣旨を説明し、喜岡、松本が続き、3名ともそれぞれ手元資料の必要もなく、自分自身の言葉で、震災で親を失った子どもたちの進学の夢を長期にわたって協力して支援することの意味と想いを語った。

記者発表が数々のマスコミで取り上げられたこともあり、翌日にはさっそく多くの問い合わせが入り、なかには「ネットの動画サイトで基金のことを知りました。恥ずかしながら目頭が熱くなりました。心から応援します」「NHKのニュースで基金の設立を知りました。大変感銘を受けたので、ささやかですが個人として協力します」などの言葉を聞くことができた。

9月27日にはやっと学校への公式案内文書やエントリーシート、推薦書類が出来上がり、本格的に支援希望者のエントリー活動に入った。

エントリーのひとつずつを確認するなか、岩手県を担当した西山は、両親を亡くして弟とふたりで栃木の親戚の家で暮らす生徒がいることを知り、面談へと出かけた。

菅野明俊君という少年、高田高校では野球部の選手であった。震災当日、部活で高校に残っていた明俊君は高台にあった練習グラウンドや施設が避難所になり、そのまま数日間暮らした。栃木の高校に転校してからも、震災の悲しみを打ち消すように野球に打ち込んだ。ある時、テレビの取材に応じた明俊君は、震災後、自分がしっかりしなければとの思いがあって一度も涙を流したことがないとのナレーションの入った映像が流れた。しかし、後になって明俊

君は「震災から1年あまりは心が空っぽになってしまい、涙を流す感情すら消えていたんです」と語ってくれた。

10月に入ると、公益法人認定の第一歩である一般財団法人設立のための登記等、藤田の仕事は佳境に入ってきた。特に会計監査には監事の石田の紹介で地元の鈴木会計士（鈴木友隆公認会計事務所）が支援を申し出てくれ、地元での基盤を作ることができた。

長沼と河崎は長く続く活動を覚悟し、当然スタッフの交代が繰り返されることを想定して、基金の活動の指針を明確にしようと「みちのく未来基金活動指針」を作った。

全ての関係者に対して常に透明な運営を約束し、以下の3点を基本的な活動の指針とする。

- 基金生に対しては、徹底して温かく接すること
ただし、決して甘やかすことはしない
- 全ての寄附者に対して心より感謝の念を忘れないこと
ただし、この基金を利用しようとする輩は断固として拒否する
- 活動に参加するスタッフは、独立した基金活動のため常に意思を共有すること
ただし、出身企業の誇りを決して忘れてはならない

たとえスタッフが替わっても決して変わることなく、迷った時にはこの原点に戻ろうとの決意を新たにした。

10月21日、「みちのく未来基金」は宮城大学を拠点として一般財団法人として産声を上げた。ゆうちょ銀行の口座も開設され、個人寄附者H様から１０００円とM様から１００００円の寄附があった。さらに、高森子どもの未来応援団様から７１５２５円と、初日に合計８２５２５円の寄附があり、いよいよ寄附者の支援活動が始まった。

後に、基金では支援してくれる個人、法人、団体の方々を、単なる寄附者ではなく真に子どもたちの未来を支えよ



うとの意志で応援してくれる「サポーター」と呼ぶこととした。

またこの日、翌年4月より、カゴメの公募によるスタッフが参加することも決定した。そして翌22日には、基金にとって後に忘れられないサポーターとなるM様から最初の寄附金２０００円が振り込まれた。この後M様は２０１２年12月27日まで59回毎週欠かさず２０００円の寄附を続けられた。振り込みのため住所も分からず、サイトでも是非お会いしてお礼を伝えたい旨知らせたが、最後まで身分を明かさずに支援してくれた。

10月27日、Y様から３９７０円の寄附が寄せられた。Y様はその後毎月４０００円前後の寄附を続けられた。ある時、西澤が、この方のブログを見つけた。Y様はタクシーの運転手さんで、基金の存在を知って「小さい力だけど応援したい」とお客様を1回乗せるたびに10円ずつため続け、支援してくれたのだった。この支援は、現在も続いている。

時を同じくして、念願の公益財団法人の認可申請を提出し、11月18日に開催された公益認定等委員会にて承認された。申請からわずか3週間という異例の速さで認定され、切りの良い12月1日から「公益財団法人みちのく未来基金」として改めてスタートすることとした。

7月に堀弁護士を訪問して支援の約束をいただいてから、藤田の申請書類作りに親身になってアドバイスしてくれた内閣府公益認定等委員会事務局の小川拓也さん、委員長の池田守男さん（資生堂相談役）はじめ多くの方々の本当に温かい支援を得て、公益法人として活動できることはスタッフにとって大変な励みとなった。

公益法人が認定されたことを伝えるマスコミ発表資料には、福島県高校校長会会長で安積黎明高校の杉校長から「～みちのく未来基金に感謝する～」との題でメッセージが寄せられた。

「東日本大震災は多くの人から大切なものを容赦なく奪い去った。親を亡くした高校生はこれまで描いた将来の夢を諦めざるを得なくなった。しかし、天は奪うだけではなかった。地域貢献のために教育に投資し、高校生の夢を守ろ

うと『みちのく未来基金』が生まれた。この基金により、多くの高校生の夢の花の種子が大地に蒔かれた」

しかし、スタートしたばかりの基金は簡単に認知してもらえるはずもなく、基金の名刺の裏に全員出身企業を明記して基金の案内をして歩いた。発起した3社は幸いにもいずれも生活に身近な企業として認知されていたこともあって、とても大きな効果があった。

11月21日、仙台市内内陸部の高校から、対象者がいるとの情報が入った。この生徒は父親が沿岸地域に仕事で出向いて被災し、遺児自らが基金の存在を知り問い合わせたものであった。これを機に、沿岸以外の高校にも電話確認を行うこととした。２０１４年4月に幼稚園教諭として社会に巣立っていったこの遺児は内村希さんといい、「内陸の高校に通っていたので周りには同じ境遇の生徒は無く辛い思いをしていたが、みちのく未来基金で多くの仲間と出会い、自分も頑張る気持ちになり、念願の幼稚園教諭の夢が実現できた」と語ってくれた。

また、釜石出身の小林祥子さんは、漁協に勤めていた父親を津波で亡くした。生前、美容師になりたいと父親に話した時、「お前が美容師になったら、最初に俺の髪を切らせっから」と返ってきたという。その言葉を励みに進学した美容学校を卒業し、２０１４年3月のみちのく未来基金第3期生の集いのスピーチで、「私たちは震災で皆一度は進学の夢を諦めました。でも、みちのく未来基金に出会って、また新たに自分の夢に向かって頑張ることができました。サポーターの皆さんのお陰で今の私たちがいます。自分の夢を諦めず、叶える希望を持たせてくれてありがとうございました。これからも、みちのく未来基金の1期生として、2期生や3期生、そして未来のみちのく生たちを支えていきたい」と語ってくれた。

2人の言葉に、スタッフはこの基金の設立に奔走してきたことで少女たちの夢の実現の後押しができたと強く実感した。

11月24日には、宮城学院女子大学へ入学が確定した生徒の振り込み手続きがあり、給付の第1号となった。



一方、基金の存在を知ったある被災者から、「遺児ではないが、家も全て失い、子どもが進学できなくなったので、なんとか支援してもらえないか。せめてお金を貸してくれるだけでもいい」という電話が入った。電話を受けた河崎は、この基金は遺児・孤児を対象とした基金なので申し訳ないが支援はできないと伝えると、「自分が死んでいれば子どもは進学できたのに」と話され、この基金だけでは支援しきれない多くの被災者の気持ちを改めて知り、スタッフ一同胸を締め付けられる思いになった。

ある日、岩手を担当した西山に、内陸に転校した遺児の母親から電話が入った。親にお金の心配をさせたくないという思いから、生徒が自ら基金にエントリーした。しかし、推薦入学試験により、早期に入学が決定したため、基金からの支援が間に合わないのではないかと不安になった生徒は、内陸部の転校先の教員に入学金について相談した。しかし、教員から返ってきたのは、「先に自分たちで振り込んでおけばいいじゃないか」という返事だった。金銭的に困窮している家族にとっては、それが難しい現実であるにも関わらず。そこで悩んだ生徒がようやく母親に相談し、基金の存在を知った母親が、相談の電話をするに至ったというのだ。

「基金で対応するから心配しないように伝えたら、ホッとしたようだった」と西山は語ったが、一方で、同じ県内でも被災地と内陸部に生じている温度差を感じるできごとだった。

11月25日のミーティングでは、スタッフの中から「4月に進学する奨学生への『奨学金贈呈式（仮称）』をやってはどうか、との意見が出て、それまで他の支援活動に参加していたロート製薬の辻佳代子が新たに基金のスタッフに合流し、リーダーとなり、二瓶と一緒にこの企画を担当することとなった。

そして、このイベントの構想はスタッフの議論を経るごとに膨らみ、翌年3月24日の「みちのく未来基金第1期生の集い」として開催され、その後、様々な意味でこの基金の最も大切なイベントとして成長することとなった。

当初のイベントの趣旨は、進学が決まった遺児たちに集まってもらい、基金から給付金の目録を贈呈することだったが、子どもたちとの面談を通して、またサポーターからの励ましの電話や手紙などを受けていたスタッフは、まず

第一に見知らぬ土地で、実家の家族を心配しながら暮らす不安を「一人じゃないんだよ、仲間がいるから」と奨学生（後に「みちのく生」と呼ぶようになる）同士が交流できる場にしたい、第二には長期にわたって支援を約束してくれた企業サポーターの方々に、夢に向かって歩み始めた遺児たちに会ってほしいとの思いが強くなり、みちのく生同士、そしてサポーターを交えた交流の場「集い」にしようとなった。

まだまだ交通網が寸断されたなか、みちのく生にどうやって集まってもらうのか。3・11のあの日から親を亡くした悲しみと、校舎が流され授業が再開されるかさえ分からないなか、進学の夢を捨てようとして心を閉じてきた遺児たちが、果たして集まって短時間で打ち解ける会ができるのか。リーダーの辻は悩んだ。結果、1泊2日のイベントとして開くことを決め、1日目はみんなで一緒に何かを行い、夕食を共にし、夜は語り合える場にすること。2日目はカゴメの協力を得て、みちのく生がみんなで料理を作ってサポーターに食べてもらおう、そして一人ひとりからこれからの夢を一言語ってもらおうというプログラムの骨子が固まった。

しかし、プログラムは決まったものの、1日目が大問題でどう仕掛けるか、かけられる予算もなく手作りで進めることを基本としたが、辻はまずは子どもたちをリラックスさせるためにはプロの支援が必要と考え奔走し、劇団「音楽座ミュージカル」（東京都町田市）の支援を得たいと提案した。

河崎は聞いたこともない劇団に任せていいものか不安で、西澤にどんな劇団か見に行かせた。西澤は公演を見学後、ミーティングでのスタッフからの問いに「大丈夫！」と一言答えた。

何もかもが皆初めての経験ばかりで、全てが素人の基金。スタッフ間のお互いの信頼だけがいつも頼りだった。リラックスさせる時間は音楽座に任せることとした。

もう一つの課題は、夜のみちのく生同士の「語りの時間」、果たしてみんな気軽に話せるのだろうか思案している時、長沼はカルビーの人事部で採用を担当している東千華が、初対面の学生たちがフランクに会話できる「ワールドカフェ」という手法をマスターしていることを知っていて、辻にこの時間の仕掛けを東に依頼してはと提案し、サポートしてもらえることとなった。

年が明けた1月13日、二瓶と安井は進学希望者のエントリーシートを持って仙台市内の榴岡天満宮に合格祈願に参拝した。この後、毎年スタッフ全員で参拝するのが仙台での基金の仕事始めの行事となり、２０１４年には専門学校に進学したみちのく生が就職を迎えることもあって、就職も祈願するようになった。

参拝後の昼食はトンカツ屋でのゲン担ぎも恒例となった。子どもたちからの合格の報告も次々届くようになり、高校を訪問したメンバーは本人、保護者、先生と最終手続きのための4者面談。一方、事務を担当するスタッフは入学金や授業料の振り込み手続きに追われるなか、「集い」の準備も大詰めを迎えた。

そんな3月の初め、既に進学が決まった子どもの母親から「進学の支援に感謝します。でもその後あれこれ考えたのですが、みちのく未来基金さんをはじめ本当にたくさんの支援を感じて、逆に支援に頼るだけでなく、もっと自分たち自身でなんとかすることに一生懸命にならないといけないと思い始めました。基金からの支援を辞退したい」との電話が入った。スタッフは、せめてお子さんの進学に関わることだけでも支援を受けてはどうかと説得したが、「他のお子さんのために使ってほしい」と母親の意志は固く、辞退を受け入れることとした。この母親の想いを受け、スタッフは改めてサポーターからの寄附を1円たりとも無駄にしてはいけないと意を強くした。

辻と二瓶はこの企画を映像で残そうと考え、撮影を担ってくれる人物を探すことに苦労したが、五十嵐敏信さん（五十嵐ＩＣＴプロモーション）に出会った。五十嵐さんは自らも被災していたが、基金の趣旨に深く感動し、力になりたいと申し出てくれた。その後もみちのく生の成長の記録やホームページ制作、季刊紙の発行など様々な支援を続けてくださっている。

最終的に進学を果たした第1期生は当初予想の約2倍の96名となり、何もかも手探りで基金を立ち上げ走り続けたスタッフにとって、嬉しい誤算となった。

そんな震災から1年が過ぎた3月21日、後に第2期生となる内山ゆきのさんのお父さんが単身赴任先の石巻で急死した。内山哲之さんは震災時石巻市立病院の医師で、２０１１年3月11日、手術中に地震となり、停電の中、懐中電灯で手術を行った。その後、津波が病院を襲い、約１５０人の患者、職員と共に上階に避難したが外部との連絡は途絶え、患者の治療をしながら2日間過ごしたが、水に浸かりながら石巻赤十字病院へドクターヘリの要請に行き、3日目、ひとりの死亡者も出さず全員救助した。その後、石巻赤十字病院に異動し、被災者を含めた多くの患者さんの治療のため、毎日約20㎞の道のりを診察して回ったという。そして3月21日、内山医師が出勤してこないことを心配した職員がアパートを訪ね、遺体を発見した。内山医師は過労死と判断され、震災関連死に認定された。

ゆきのさんは1年後、みちのく未来基金第2期生として、お父さんが生前薦めてくれた患者の退院後の社会復帰を支援する医療ソーシャルワーカーになりたいとの夢を持って進学を果たした。

２０１４年10月、同じく2期生で南三陸町出身の遠藤洋希君とともに村井宮城県知事との面談に臨んだゆきのさんは「父親がいない代わりに、親がたくさんいるようだ」とサポーターの支援に感謝した。

様々な想いを胸に秘めながら、子どもたちは進学し、夢に向って歩み始めた。

## 第四章　初めての「集い」

3月23日、「集い」の前日は、1日目の会場となる東北自治研修所周辺が大雪となり、翌朝岩手県宮古方面からバスで移動するために現地入りしたスタッフはじめ皆不安の中、カゴメからスタッフとして新たに加わる北岡祐治と山田健太郎が合流し、これでカゴメ、カルビー、ロート製薬3社の人的支援体制が整った。応援のカルビー、ロート製薬の若手社員を含めた全員で、準備は夜中までかかった。

3月24日、いよいよ「みちのく未来基金第1期生の集い」初日、雪もあがり、愛する父や母の一周忌や引っ越しの準備などで忙しい中、スタッフの引率で各地から54名のみちのく生が不安げな面持ちで続々会場に到着した。

さっそく最初のプログラムとして音楽座に任せた参加者同士の「アイスブレーク」が行われ、緊張で固まっていたみちのく生たちも徐々にほぐれ、同じ仲間と触れ合いながら体を動かしたり、一緒に作業していくごとに、あちこちで笑顔が見られるようになった。

会話も出始めた夕食会の後は、1日目の最大のイベント「語りの時間」。みちのく生がそれぞれの夢をテーマに気さくに語り合える時間をと、会場は35歳以上入室禁止とし、若い基金スタッフとみちのく生たちの会話が弾んだ。みちのく生たちはやはりこれからの大学生活や一人暮らしの不安を話したが、一方同じ経験をした多くの仲間がいることも支えになることを感じたのだ。

2日目は会場を変えて宮城大学に移動し、全国各地から集まってくれた34名のサポーターを迎えた。カゴメ社員の指導で、みちのく生が慣れない手つきで作ったランチを囲んでサポーターと一緒に過ごした後は「門出の会」。1期生を代表して岩手県陸前高田出身で新潟の大学に進学した菅野明俊君が、「震災で進学を諦めて働こうと思っていたが、皆さんの支援のお陰で進学の夢が叶いました。いずれは社会に、ふるさとに貢献できるような人になって支援していただいた全ての皆さんに恩返しがしたい」と彼らしい誠実な語り口でお礼を伝えた後、みちのく生全員が一人ひとり、将来の夢やふるさとへの想いを自分の言葉で語った。

そのなかで三浦美咲さんは、「当たり前のことが当たり前でなくなってしまったので、これからは当たり前のことに感謝して、いずれは地元の役に立ちたい」と前を向いて語った。

サポーターの方々は参加したみちのく生の情報が書かれた資料を見ながら、その一言ひとことに熱心に耳を傾けた。参加したサポーターの薬王堂の西郷辰弘社長ご夫妻は、地元岩手県の子どもたちの一言一句をメモし、その後毎年「集い」に参加して、子どもたちに声をかけてはその成長に目を細めている。後に、季刊紙『みちのく未来通信』の取材に応じて、西郷社長は「皆さんとても辛い経験をしましたが、それに負けないで夢を忘れることなく、必ず実現するんだという力強い気持ちで進んでほしい」と、そして、奥様の喜代子さんは「私たちはいつでも応援しています。けれど本当に道を拓くのは自分自身です。そのことを忘れずに前に進んでいってほしい」とそれぞれ父親、母親の気持ちを代弁するようなメッセージを寄せてくれた。

翌年の「第2期生の集い」では、この1期生の中から21人がスタッフとしてイベントを支えてくれ、「第3期生の集い」では1、2期生42人が運営に参加してくれ、3期生のサポート役となって活躍した。

気仙沼出身で岩手県内の高校を卒業後、弘前の大学に進学した尾形和さんは、第1期生として「集い」に加わり、その後も第2期、第3期のスタッフとして参加。同じ1期生の日向野優美さんと知り合った。日向野さんは石巻出身で、東京の大学に進学していた。

ふたりは夏休みなどにも時々会うようになり、このまま支援してくれたサポーターの方々にお礼も言わずに卒業して社会に出るのも悔いが残る。それに、被災地を離れて全国に移り住んだ遺児たちもたくさんいるにも関わらず、基金の存在を知らないまま進学の夢を諦める子もいることを基金のスタッフから聞いていたので、互いに何かしたいとの想いになった。

2013年9月、みちのく生の語りの場の「ｍｉｃｈｉ　ｃａｆｅ」で日向野さんが突然、「お世話になったサポー

ターへのお礼と、全国の未来のみちのく生へ基金の存在を伝えたい。そのためにイベントを通して、マスコミで伝えたいので、企画してもいいか」と発言した。同席した河崎と長沼は、子どもたちと出会って2年が経ち、彼女らがそんなことを考えるようになっていたのかと、驚くと同時に嬉しく思った。

ふたりがリーダーとなり自立的に準備を始めたが、全国にいる1期から3期のみちのく生と、ミーティングを含め、どう企画を進めればいいのか頭を悩ませた。それでも、約50名のみちのく生の賛同を得て準備を進めた。

２０１４年8月、石巻中瀬地区にある石ノ森萬画館の隣地で、「みちのくフラワープロジェクト」が実施された。これは、約30名のみちのく生が現地に集合して、自らの気持ちを伝えるためにつくられたフラワーアートだ。

当日はみちのく生たちが案内を出した個人サポーターが、兵庫、石川、愛知、東京、千葉などの遠くから見に来てくれ、支援している子どもたちと嬉しそうに会話している様子がとても印象的だった。ここで掲示された、みちのく生のメッセージボード。そこに尾形さんは、こう書き込んだ。

「生きているからこそ伝えられる〝ありがとう〟を　未来の希望を　出逢いという喜びを　ここで届けます！」

みちのく生は、それぞれ同期の横のネットワークだけでなく、1、2、3期の繋がりができ始めていることを強く実感している。子どもたちの多くは看護師、栄養士、薬剤師、美容師、調理師等の道を選び、震災当時避難所で過ごし、多くの人の支援を得たことが自身の進路を考えるきっかけになったと語った。また、子どもたちは、「いずれふるさとに戻って、復興の役に立ちたい」「震災でお世話になった人たちに恩返しがしたい」「将来は、自分も誰かの役に立てる人になりたい」と口を揃えて言う。

愛する親や家族を失い、絶望の淵に立っていた遺児たちから夢や希望までも捨てさせてはならないとの思いで、皆必死に走ってきた1年。子どもたちが夢に向かって一歩前へ歩み出す背中を少し支えられたことを実感した。

スタッフとともに現場を走り回り、子どもたちと出逢い、この基金の立ち上げに力を貸してくれた多くの支援者のお陰で今こうして壇上で話す子どもたちの一言ひとことが胸を熱くさせ、長沼と河崎はその言葉を聴きながら「何とか間に合った」との思いで涙が止まらなかった。

西山は「集い」終了後、岩手県田野畑村から参加してくれたみちのく生の少女を、7時間かけて送り届けた。

みちのく生の多くは、進学先では、震災で被災したことや大切な親を亡くしたことを、ほとんど語っていない。話せばあの日を思い出し、悲しみが蘇るからだと言う。しかし反面ふるさとを離れ、あの日のことが日本中から忘れ去られることも嫌だと思っている。何かをしなければと動き始めた子どもたちもいる。

3・11の東日本大震災で例えようのない悲しみや苦しみを経験した遺児たちは、多くの支援者と出会い、その優しさを感じ、そして今、強くなろうとしている。そして基金のスタッフも皆、この遺児たちとの出会いを通して、厳しい状況の中残った親を、弟、妹を思い、寡黙だけれどひたむきに夢や希望に向かって前へ歩もうとする子どもたちから、かけがえのない数多くのことを学んだ。

その後、努力の甲斐あって、徐々に支援者の輪が広がっていった。

第五章

# 卒業するその日まで

２０１２年初夏、スターバックス コーヒー ジャパンの足立紀生さん（広報部長）がスタッフと共に基金を訪ねてきた。スターバックスは震災後、被災地でのコミュニティ作りの支援としてコーヒーを提供する「道のカフェ」を続けてきたが、新しいプロジェクトを検討するために話を聞かせてほしいというものだった。そのなかに酒井恵美子さん（広報部）がいた。本社に帰った酒井さんたちは子どもたちの様子を聞き、企画を練り上げた。そのなかで南米に伝わる民話で『ハチドリのひとしずく』から取り入れた「ハミングバード・キャンペーン」を幹部に提案した。『ハチドリのひとしずく』とは以下の民話だった。

森が燃えていました
森の生きものたちは
われ先にと逃げていきました

でもクリキンディという名のハチドリだけは
いったりきたり
くちばしで水のしずくを
一滴ずつ運んでは
火の上に落していきます

動物たちがそれを見て

「そんなことをしていったい何になるんだ」
といって笑います
クリキンディはこう答えました
「私は私にできることをしているだけ」

出典：辻信一監修『ハチドリのひとしずく』（光文社刊、２００５年）

酒井さんをはじめとする企画に携わったスタッフたちは、１千店舗、２万５千人に及ぶお店のパートナー（スターバックスでは、店のスタッフをこう呼ぶ）やお店を訪れるお客様一人ひとりがハチドリになれる企画をと、「ハミングバード・キャンペーン」を立ち上げ、この年の秋からスタートし、すでに３年目を迎え、毎年約10万人に及ぶスターバックスファンがみちのく生の支援に参加してくれている。

その後、２０１３年４月には、エバラ食品工業から竹中俊之がスタッフに加わり、それぞれの企業スタッフたちは交代を経て吉田朋代、山田理美、齋藤雅子、大内日花里、佐藤清、瀬川敏克、中村杏菜、末田隆司、佐藤篤子が参加して創立期のメンバーの想いを繋いでいる。

「みちのく未来基金」を立ち上げて３年半が経ち、第１期生も社会に旅立ち始め、これまで４２４名の遺児たちが進学を果たした。あの震災の直後から日本中で「何かをしなければ」と様々な支援活動が始まり、私たちも震災遺児の進学支援をテーマに手探りしながら一歩一歩活動を続けてきた。

困難な場面に出会うたび、必ず支えてくれる人が現れ、私たちはよく「風が吹いている」と話したものだ。子どもたちのことを想う多くの人たちが一筋の光を灯すために交わり、集う、そんなみんなの「想い」が「みちのく未来基金」という形になったと確信する。

当初は奨学金を給付するということを目指してスタートしたが、遺児たちと出会い、サポーターの方々と出会い、私たちの活動は夢に向かう子どもたちと応援する支援者の「想い」を繋ぐことなのだと改めて気づいた。

民間企業が想いをひとつにして手作りで作り上げてきた「みちのく未来基金」、ここで初めて出会い、違う企業文化の中で育ったメンバーが目の前にいる子どもたちのことだけを考え、年齢もキャリアも関係なく、時には激しい議論もしながら、また時には子どもたちの悩みや声に耳を傾けながら、最後の遺児が大学や専門学校を卒業するその日まで、約25年間活動を続ける。

震災から1年半後に基金のＳＮＳに投稿してくれた、みちのく生のメッセージを紹介する。

昨日で1年半……、いつの間にかそんなに時間が経ってたんだなってテレビに地元が映ってんの見て思った。この1年半、いろんなこと経験してきたし感じてきた。たくさんの人に支えられて、励まされてここまで来れたんだなって。ほんといくら感謝しても足りないくらい。

あの日からわたしの生活は一変した。それまで当たり前だったことが当たり前でなくなった。水も電気も食べ物も。水がない不便さ、電気がない恐怖、食べる物がない不安、生きるって大変なんだなって改めて実感した。

どうしたらいいかわからない毎日を生きていくのでいっぱいいっぱい。どれだけ泣いたかわからない。誰にも会いたくないし、何もしたくない。そんな日がずーっと続いた。

大学目指してたけど学校がいつ再開するかもわからない。いや、それ以前に進学できる？諦めるべき？いろんなこと考えた。お母さんひとりにして東京行きたくない。学費は大丈夫かな？迷ったりもしたけどお母さんは背中を押してくれた。「お父さんもきっと応援してくれるよ！」って……。お父さんはいつもわたしの大学進学について真剣に考えてくれていた。いろんな大学の本を読んで付箋を貼って「ここの大学どうだ？」って。その時は、またかよ……って適当に聞き流したりもしたけど、今考えるとほんとわたしのこと考えてくれてたんだなって。だから今通ってる大学もお父さんが見つけてくれた大学。保育士になりたい！っていうわたしのためにお父さんが探してくれた。

ほんと今更だけどありがとう。そして、そこに通えているってことは、みちのく未来基金の方々をはじめとするたくさんの方々のおかげ。

感謝の気持ちを絶対忘れない。そして、わたしも誰かのために一所懸命になれる人になりたいと思った。感謝しても足りないけど、本当に本当にありがとうございます。これからもがんばります。

２０１２年９月13日　震災1年半　Ｎ・Ｓ



最後に、基金創設までの最初の1年間に関わったメンバーそれぞれの「想い」を伝えたい。

**二瓶真衣**

「東北の子どもたちの夢が震災によって絶たれてはいけない！」後にみちのく未来基金第1期生となる、高校3年生の彼らと会い、話をするなかで、その想いはどんどん強くなっていきました。一人ひとりの顔を思い浮かべながら手探りで形を作り上げていった基金。様々な巡りあわせと多くの方のサポートがあったからこその立ち上げだったと、皆さまに心から感謝しています。私にとっては、ひたむきな生徒たちの背中に、たくさんのことを教えてもらった時間でした。みんな、どうもありがとう。

**藤田晋太郎**

津波の被害を受けた街の惨状を目の当たりにした瞬間の記憶は、今でも鮮明に残っています。家族・友人・自宅・故郷を失い、避難されている方々とお会いして、なんとかこの方々の力になりたいと思った反面、あまりの甚大な被害に途方に暮れたことを思い出します。当時は何もかも手探りで進めていきましたが、「みちのく未来基金」という民間企業が協働して取り組んだこのスキームが、今後の社会貢献のひとつのモデルケースとして活きてくれれば幸いに思います。

**西澤省吾**

全てが手探り状態のなか、「震災で親を亡くした子どもたちのために」というメンバー全員の想いだけで無我夢中の1年を駆け抜けました。支援者に説明している最中、子どもたちのことがふと頭をよぎり涙を流したり、またわからないことばかりで体調不良になったこともありました。しかし、多くの方々から支援をいただいたことや子どもたちが自分の道を切り開いていきたいという想いが、無事子どもたちを進学させることができた大きな原動力に繋がったのだと実感しています。そして、今後も「みちのく未来基金」が20数年に渡る役目を終え、無事解散するまで応援し続けていきたいと思います。

**辻佳代子**

第1期生の集いの初日、生徒たちを迎えた時のドキドキした気持ちは今も覚えています。集いの意味、自分たちに何ができるかたくさん迷い、悩みながら進めてきました。でも、生徒たちが互いに笑顔を交わし、自分の言葉で夢を語る姿を見た時、みちのく未来基金を意味あるものにしていくのは他でもない子どもたち一人ひとりの力なんだと気づきました。基金を支えてくれる全ての方々への感謝と共に、生徒たちの未来にエールを送り続けたいと思います。

**西山隆則**

東日本大震災の発生から、みちのく未来基金をあれだけ短期間でスタートできたのは、ある意味で奇跡的でした。それは私たちだけではなく、それを支え、応援してくださった周囲の方々の想いが後押しし、実現できたものだと思っています。震災時に高校3年生にあがった生徒たち（第1期生）の夢を少しでも応援できたことを誇りに持つと同時に、関わってくださった全ての方々に深く感謝いたします。

**安井正紀**

私にとってみちのく未来基金は「つくる」という一言に尽きます。基金の土台は学校の先生に教えて頂いて「つくる」ことができ、震災遺児の未来の道を「つくる」ことで子どもたち自身やご家族、先生の笑顔と安堵感を「つくる」ことに関われたことは私の誇りです。「つくる」のは物だけではないことを改めて教えてくれたみちのく未来基金や生徒、先生に感謝し、ご支援頂いているすべての方に御礼申し上げます。

**河崎保徳**

東日本大震災直後の被災地で見た街の光景はとても酷いものでした。それ以上に私の脳裏に強く焼きついたのは、避難所で生気を失った多くの子どもたちでした。悲しみに深く沈み、希望を失いかけたその眼は一生忘れられません。1年後にみちのく未来基金が支援できた生徒の数は、予想の2倍近い96名にも及びました。何より彼らは不安の中にも希望を持った力のある眼をしていたことを忘れません。本音を一言。とにかく無我夢中でした、間に合ってよかった。



## あとがき

東日本大震災から4年が過ぎ、あちこちで風化が始まっています。「3・11」を決して忘れてはならないとの想いから「みちのく未来基金」の設立の経緯と第1期生の集いまでの1年間を記録に残そうというメンバーの気持ちがひとつになり、この本を出版することとなりました。

4月20日、ロート製薬山田会長のひとことがきっかけとなり、カゴメ、カルビーの民間企業3社が協働で短期間に震災遺児の進学支援基金を立ち上げ、活動を行うという、後に各方面からよく協働でできたと不思議がられるプロジェクト。この記録は、約25年という長い活動を継続するため、受け継がれるスタッフが皆この設立の1年をきちんと理解し活動することを願い、綴ってきました。

出版の後押しをしてくれた元専修大学附属高校校長の鈴木高弘先生、日頃から支えてくれるカゴメ、カルビー、ロート製薬、エバラ食品工業の皆さま、そして全国のサポーターの皆さまとみちのく生に、心より感謝申し上げます。

尚、文中の所属等は当時のものです。

長沼孝義

## 資料

［みちのく未来基金設立趣旨書］

２０１１年3月11日に発生した東日本大震災は、東北から関東の広域に及ぶ地域に甚大な被害をもたらし、多くの尊い命が失われました。震災で犠牲になられた皆様には心よりご冥福をお祈りするとともに、震災にあわれた皆様には心よりお見舞いを申し上げます。

巨大な津波による被害は、人々の命、生活、仕事、コミュニティ、あらゆるものを飲み込んで奪い去っていきました。この震災からの復興は容易ではなく、数十年に及ぶ長い道のりと思われます。

復興は、経済復興、地域コミュニティの復興、そして被災者の心の復興と、あらゆる努力が求められるのは言うまでもありませんが、私たちは真に復興の礎となるのは、これから育つ次世代の若者たちであると考えています。彼らがこの東北の地において、夢や希望を捨てずに育つことこそが復興の土台となり、未来を創ってくれると信じています。先の阪神・淡路大震災においても、遺児たちはその経済的な側面からも夢や希望を早期に諦めたり、故郷を離れるといった傾向が顕著でした。彼らに安心して夢を追い続けてもらうこと、これこそが復興に欠かせないキーワードではないでしょうか。

このような認識のもと、私たちは震災によりご両親あるいはいずれかの親を亡くした子どもたちが夢を持ち続けながら成長していくことを長期に渡ってサポートしていくことで、被災地の復興を支援していこうと考えております。そのなかでもサポートの少ない「大学および専門教育への進学」に焦点をあて、この東北の地、ひいては日本の復興を支えていく人材を育成することに寄与したいと考えています。

また、もうひとつの大きな意義は、本基金設立にあたり民間企業3社が協働でプロジェクトを行うことに至ったことです。これまでの民間企業の社会貢献活動は毎期の業績に左右されがちで、中長期ベースの活動にはなかなか踏み切れずにおりました。しかし、この未曾有の大震災を機に企業の社会的責任というものを改めて自問自答し、ビジネスにおいてお世話になっている社会の皆様のお役に立てる活動を長期に行っていくことこそ社会的使命ではないかと思うに至り、その志を同じくする仲間とともに本基金を設立し、東北の復興のため、日本の復興のために行動する決意です。

今後、志を同じくし、ご賛同を頂く皆様には是非ともご参集いただき、ご一緒に活動して頂ければ幸いに思います。

皆様のご理解とご協力を心からお願い申し上げます。

２０１１年12月1日

公益財団法人　みちのく未来基金

# みちのく未来基金の軌跡

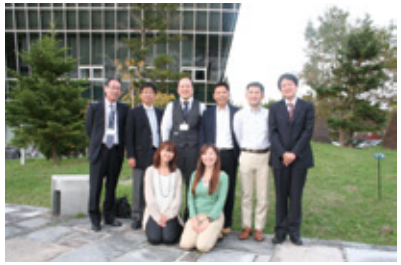
みちのく未来基金第一期生の集い。スタッフとサポーター、みちのく生の総勢100人ほどが集まった。（P24）

9月21日に行われた記者発表では、3社のトップ、山田、喜岡、松本が同席し、約50人の記者の前で「支援を25年間続ける」と宣言した。壇上は左からカゴメの喜岡、ロート製薬の山田、カルビーの松本（当時会長）。（P15）

第2期生の集いを支えた第1期生スタッフ21人。年を重ねるごとにサポーターも増え、毎年子どもたちの顔を見るために参加するサポーターもいる。（P25）

10月21日、第一期のスタッフによって事務所が宮城大学で立ち上がった。ここからみちのく未来基金の歩みが始まる。（P16）

「東北を支援下さっている方へ感謝の気持ちを伝えたい」という想いを持って、みちのく生達が主体となって企画したみちのくフラワープロジェクト。宮城県石巻市の石ノ森萬画館前で開催され、地元の人々や県外からのサポーターなど300人ほどが来場した。（P26）



みちのく未来基金第一期スタッフ。後列左から、長沼、河崎、安井、西山、藤田、西澤。前列左から辻、二瓶。設立の忙しさに追われ、当時の写真は二枚しか残されていない。（P19）

みちのく第４期生の集いを記念してこの絵をデザインしたのは、第２期生の赤間華怜さん。

もともと絵を描くことが好きだという赤間さん。ひとつの大きな「巣」をみちのく未来基金に見立て、その中にはまだ出会っていない４期生（たまご）と、出会いを待ちわびている自分（ひよこ）たちがいる。巣の周りには、巣立った卒業生が、これから新たに出会うみちのく生たちを見守る。伸び続ける葉は、段々広がっていく支援の手。大きな“わ”のなかに、こどもたちの「未来」「明日」「希望」が詰まっている。

**山田邦雄**（やまだ・くにお）

ロート製薬会長兼CEO。1956年生まれ。1979年に東京大学理学部物理学科卒業後、1990年に慶應ビジネススクールMBA（経営学修士）を取得。1980年にロート製薬に入社。1992年に専務、1996年に副社長、1999年に社長を経て、2009年6月より現職。

**喜岡浩二**（きおか・こうじ）

カゴメ相談役。1942年生まれ。大阪市立大学法学部卒業。1964年カゴメ入社。1987年に取締役就任。1994年に代表取締役専務、1996年に副社長、2002年に社長、2009年に会長を経て、2012年より現職。

**松本晃**（まつもと・あきら）

カルビー代表取締役会長兼CEO。1947年生まれ。京都大学農学部修士課程卒業後、伊藤忠商事株式会社に入社。ジョンソン・エンド・ジョンソン メディカル株式会社代表取締役社長、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社代表取締役社長、最高顧問などを経て、2009年より現職。

**河崎保徳**（かわさき・やすのり）

ロート製薬経営企画本部広報・CSV推進部担当部長。1960年県生まれ。近畿大学商経学部卒業。1986年ロート製薬へ入社。2002年商品企画部部長、2004年、ヘルスケア事業部副本部長などを経て、2010年HC事業本部流通サポートセンターセンター長などを経て、2011年3月震災復興支援室室長。2014年より現職。

**長沼孝義**（ながぬま・たかよし）

みちのく未来基金代表理事。1949年生まれ。1976年にカルビーに入社。商品本部マーケティング企画部長、中部事業部長、取締役執行役員、取締役常務執行役員、取締役専務執行役員を歴任した後、2009年6月に上級副社長執行役員に就任、2013年退任。2011年より現職。

編集：　柿原優紀、原山幸恵（tarakusa）
デザイン：中村未里（MiMiZK）、中村荘平
イラスト：松尾ミユキ
校正：　白神憲一（有限会社アストロワークス）